

ルソーにおける道徳と政治
——「弱さ」の概念を手掛かりに——

平 光佑（同志社大学）

本発表の目的は、「弱さ(faiblesse)」についての検討を通じて、ルソーにおける道徳と政治の関係を明らかにすることである。

ルソーが人間を考察するにあたって「憐れみ(pitié)」の感情を重要視したことはよく知られている。『人間不平等起源論』によれば「憐れみ」は、「自己愛(amour de soi (-même))」とともに人間の在り方を規定する、反省に先立つ自然の感情である。人間の存在原理は第一に自己愛であり、その限りでその人間は他者に対する関心を持たない独立した存在である。しかし他の存在が苦しむのを見て憐れみの感情を抱く限りでは、彼は他者と関係する可能性を持っている。『エミール』ではさらに、「人間を社会的にするのは彼の弱さである」とまで言われている。自分が弱い存在であることを知っている人間は、同じく弱い立場に置かれた存在に対して自己を同化することによって憐れみの感情を持つようになり、そこから社会性が生まれるのである。『エミール』においては、他者との関係の中で行動する存在という意味で、社会的であることと道徳的 moral であることとはほぼ重なる概念であるので、弱さこそが人間を道徳的存在にするのだと言える。

それでは、道徳原理としての弱さないし弱者に対する憐れみは、政治原理をも導き出すだろうか。ハンナ・アーレントは『革命について』でこの問いを念頭に置いて、フランス革命を批判的に考察した。フランス革命の闘士たちは下層民に対する憐れみを革命推進の原理としたのだが、アーレントによれば、それは「徳のテロル」を生んだだけで決して政治原理とはならず、安定した体制を生み出すことはできなかった。

このようなフランス革命批判は、そのままルソー批判として当てはまるだろうか。ルソーは政治理論に憐れみを持ち込んだのだろうか。意外なことだが、政治原理について扱った著作『社会契約論』には弱さや憐れみへの言及は一切見られず、政治を道徳から截然と区別しているかに見える。そこでは、人々を結びつける役割を果たしているのは、弱さという人間の本質ではなく、利害の一致に基づく社会契約という行為である。ルソーが道徳の原理としての弱さや憐れみを政治理論にも取り入れたというのは、短絡的な見方である。

しかし『社会契約論』に見られるこうした事実と裏腹に、『エミール』では「政治と道徳とを別々に取り扱おうとする者は、そのどちらにおいても何一つ理解しないだろう」とも述べられている。このことを整合的に理解するためには、「道徳」という言葉の持つ意味の幅を考慮しなければならないだろう。結論は以下ようになる。すなわち政治は、自己と他者との関係を取り扱う点で、広い意味での道徳の一部である。しかしだからと言って、弱さの認識や憐れみの感情のような狭義の道徳性が直ちに市民の恒常的な政治的結合を生み出すというわけではない。共通利害を目指す市民の意志なくしては政治は成立しないのであり、それゆえ道徳と政治とを単純に同一視することはできないのである。